

2021年12月26日 説教「神の愛を求めて」

コリント人への手紙第一 13章 13節

2021年の年末礼拝です。今年の御言葉はコリント人への手紙第一13章13節でした。この章は「愛の章」として知られています。日本語の愛という言葉は、男女の愛や人間相互の愛のことを言う場合がほとんどですが、この愛とは「神の愛」(アガペー)のことです。13章13節はこの章の結論になります。姉ヶ崎キリスト教会でも、様々なかたちでこの章節を学んできましたが、年末にあたりまとめていきましょう。

1. 信仰 (13節)

- ①いつまでも残る 「こういうわけで、いつまでも残るものは」「いつまでも残るもの」は、見えるものではありません。確かに見えるものは一定の力や安らぎを与えます。しかし、ソロモンが伝道者の書で述べているように、それらは究極の価値ではなく「空しい」のです。
- ②へブル書 11章 「信仰」へブル書 11章は旧約聖書の信仰者たちの「信仰」が列挙されています。そのなかで興味深い言葉があります。「これらの人々は、信仰の人々として死にました。約束のものを手に入れることはありませんでしたが、はるかにそれを見て喜び迎え、地上では旅人であり寄留者であることを告白していたのです」。信仰者たちは人生を旅と見立てていたのです。旅人はたくさんの荷物を運ぶことはできません。たくさんあれば、進みにくいでしょう。どうしても価値のあるものを求めざるを得なくなります。いつまでも残る信仰の手本がここにあります。
- ③ローマ人への手紙 4章 「信仰」この章にもアブラハムやダビデの信仰について言及されています。ただ、ローマ書は救済論が語られていますから、救われるにあたって必要なのは、他でもなく「信仰なのだ」という視点から、「信仰」について述べられています。この時の「信仰」というのは「行い」と対比して考えられています。つまり、そこには律法を守り行うから救われるのではなく、「信じることによって救われる」という道が教えられているのです。私たちが救われるには、キリストの福音を信じる信仰が必要なのです。

2. 希望 (13節)

- ①希望と失望 「この希望は失望に終わることがありません。」(ローマ 5:5)とありますが、私たちは簡単に失望します。否定的な言葉、望まない出来事などが生じれば失望するのです。しかし、いつまでも残る希望の灯りを見失わないで生かしていただくのです。そうすれば、失望を与える患難に耐える力が備えられ、そうした忍耐する心は弾力性のある練られた心をもたらし、ついには安定して希望をいただく心をいただいくことになるのです。



②人間にではなく「私たちは、この望みによって救われているのです。目に見える望みは、望みではありません。」(ローマ 8:24) 私たち人間は人間に望みをおきやすいと思われまゝです。その根本的理由を考えると、「人間は神のかたちで造られた存在」(創世記 1:27) だからです。そこには一定の魅力があるのです。そこに間違いが生じるのです。人間は神から離れて墮落し、その本性の部分が罪ある存在となったのです。しかし、神から断絶関係になった人間のために、キリストが橋渡しのために、その命を投げ出してくださいました。人間はキリストを仰ぐことによって救われます。しかし、救われた者を含めて人間に希望を抱くならば失望します。救われた者も、すぐに罪の世界の虜になりやすい者達だからです。ですから永遠の方、キリストにこそ希望をいただくことです。そうすれば失望させられることはないのです。

③「永遠のいのちの望み」(テトス 3:7) 今年、私たちの群れにおいては、三人の方々を天に送りました。改めて、地上のいのちは限定されているのだということを、実感することとなりました。テトス書の 3:7 には、キリストによって救われた者に与えられるのは「永遠のいのち」であり、そこに望みがあることが示されています。永遠のいのちは、この地上のいのちを生きる間に内に与えられるのですから、そこには本当の希望がやどるのです。永遠のいのちの希望を見失わない秘訣は、キリストをいつも見上げることです。この方によって授けられたいのちなのですから。

3. 愛 (13 節)

①神を愛する「心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神を愛せよ」(マタイ 22:37) すべからず人間は、まず神を愛すべきなのです。それも全身全霊をもって愛せと教えられているのです。愛する対象がまずは神であるというところに、私たちが生きる指針があるのです。「知力を尽くして」とありますが、神について教えられている聖書を読んでいくことが、まずは私たちにできることでありましょ。また、神への祈りも、神を愛する姿勢の大切な道筋です。

②人を愛する 「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ」(マタイ 22:39) ここにある愛は、アガペー (神の愛) です。打算を度外視した愛、犠牲をも厭わない愛、出し尽くす愛、無償の愛・・・私たち自身からは、そのような愛は絞り出すこともできません。それなのに、その愛をもって愛せよとはどういうことでしょうか。キリストは私たちのために生まれ、この愛をもって生きてくださり、十字架上でその命を投げ出してくださいました。それは私たちを救うためでした。この方を見上げ、この方にしっかりとつながってこそ、私たちもこの愛をもって隣人を愛する方向へと導かれていくのです。

③神は愛 「愛のない者には神はわかりません。なぜなら神は愛だからです。」(Iヨハネ 4:8) 人間にはアガペー (神の愛) を実践することなどとてもできないと、投げ出してしまえば、それまででしょう。しかし、この愛を実現させていただこうと願わないなら、私たちは愛なる神をなかなか知ることができません。なぜならば、神のご本質が愛だからです。人は人を恐れる傾向があります。人は他人を否定し、自分を弁護しようとしまゝ。しかし、全き愛は恐れを締め出し、他人を受け入れようとするのです。愛なる神を見上げ、無限の愛に生きようとする愛の心が授けられていくように祈りつつ、今後も歩んでいきましょう。

《結論》

今朝の御言葉を通して、私たちはいつまでも残るものを目指して生きることが促されています。「信仰」「希望」「愛」。これらがいつまでも残るものとして挙げられています。今朝も、この三つについて見て来ました。ところが、13 章 13 節には「そのなかで一番優れているのは愛です」と加えられています。

なぜ、愛がもっともすぐれていると述べられているのでしょうか。それは 13 章の前半の部分で、その答えの一端が示されています。たとえば、愛がないならば、異言も預言も、あらゆる奥義と知識、山を移すほどの信仰、慈善行為などについても、愛がないならば価値がなく、何の役にも立たないと言われてところに、一つのヒントがあるでしょう。

つまり、人間はどこまでいっても、人間中心になりやすいのです。自己保身に走り、自分が褒められることを求め、自尊心に傷つけられることを恐れやすいのです。自己主張をくりかえし、主なる神を脇に追いやってしまいやすいのです。

まことの「信仰」「希望」はいつまでも残るものですが、人間のなかに宿って働くものです。ですから、人間の罪のゆえに、神からの信仰にも偽善が入り込みやすいのです。神からいただく希望も、人間のなかに入り込んでくるときに人間的な希望に置き換わりやすいのです。

しかし、神の愛 (アガペー) は、神ご自身のなかにあるものです。神は愛であり、神のなかにこそこの愛の出発点があるのです。神の愛はどこまでもいっても神に属するのです。神に属する限り、ほかのものが混じる余地がないのです。ですから、どこまでも神に属する愛は、人間との関わりで用いられる信仰や希望よりも勝っているのです。

とはいえ、この神の愛をなんとか実生活で実行させていただきたいと願うのは、聖書を読む誰にでも言えることでしょう。

「愛は寛容であり、愛は親切です。また人をねたみません。愛は自慢せず、高慢になりません。礼儀に反することをせず、自分の利益を求めず、怒らず、人のした悪を思わず、不正を喜ばずに真理を喜びます。すべてのがまんし、すべてを信じ、すべてを期待し、すべてを耐え忍

びます。愛は決して耐えることはありません。」(4~7節)

このような愛を、少しずつでも実現できないものでしょうか。その秘訣は、自分に期待しないことから始まるのです。自分の内にあるものではなく、神に期待するところに何かが始まる可能性があると言えるのです。人間中心ではなく、神中心。神に働いていただく時に、神の愛が私達のうちにプレゼントのようにして授けられてくるのです。

一年間、求め、学んできた御言葉。「いつまでも残るものは信仰と希望と愛です。そのなかで一番すぐれているのは愛です」。一年を終えるにあたって、ま

すますもって深めさせていただき、日常における人との関係にも活かされ、祝

福されていきますように。そのためにも、イエス・キリストにつながり、へりくだり

の極致の愛をいただいでいきたいのです。祝福が兄弟の上に豊かにありますように。